

丸山仁司, 他(常任編集)
石黒友康・高橋哲也(ゲスト編集)

「考える理学療法 内部障害編 評価から治療手技の選択」

内田賢一
神奈川県立保健福祉大学
保健福祉学部リハビリテーション学科
理学療法学専攻

呼吸器疾患や循環器疾患の患者を目の前にした際、「ちょっと体を動かすだけで息切れが生じてくるのに、本当に運動を行ってもよいのだろうか」とか、「昨日心臓の手術をしたばかりなのに、本当に今日から動いても大丈夫なのだろうか」など、戸惑いと不安の中で理学療法を行っている新人理学療法士の方も多いのではないだろうか。内部障害は、骨関節障害や中枢神経障害などのような目で見えてわかる身体の動きの障害としてはとらえにくいいため、難しいとの先入観を持たれているような気もするが、本書は内部障害の患者を担当した際の「なぜだろう?」、「どうして?」、「平気だろうか?」といった日々のちょっとした疑問を解き明かすのに、大きな力を貸してくれるものと確信する。

たとえば、慢性閉塞性肺疾患の患者に対する理学療法を行う際には、運動負荷量の増減に呼応する呼吸困難感や心拍数、血圧、息づかいや顔色、表情などに随時注意を払わなければならない。つまり、内部障害の

患者に対する理学療法の特徴は、リスク管理と運動耐容能の改善を同時進行で行っていくことである。急速に高齢社会となったわが国では、今後内部障害を有する患者が多くなることが予想される。

本書は総論と各論で構成されており、総論は内部障害の定義やバイタルサインなどについて述べられ、各論は「呼吸」と代謝系を含めた「循環」に分けて述べられている。特に各論においては、日々の臨床で疑問に思ったことがすぐに解決できるように「苦しくても運動をすべきなのか? —呼吸器疾患に対する運動療法」、 「心臓を手術したのに運動させても大丈夫なのか」、 「中味が問題、ただの脂だと思っていたら・・・」など、疑問点をそのまま各論の表題として用いている。また、運動療法の実際が具体的な図表や写真、イラストなどを多用して非常にわかりやすく、そして系統的に述べられていると同時に、目の前の患者に対して即実践できるような臨床的推論(クリニカル・リーズニング)を用いて丁寧に述べられている。

内部障害の患者に対する理学療法を、「難しいもの」から「楽しいもの」に変えてくれる視点が本書には数多く述べられている。内部障害に関する知識と技術を駆使して、積極的に実践の場で関わっていきたいと考えている多くの理学療法士に、ぜひ一読を薦めたい。

●B5判・506頁・2色刷

定価 6,825 円(本体 6,500 円+税 5%)

2008 年 文光堂・刊